

■「ルーツに関わる地」
・友人がたくさんいる。今は戦争が起ころないことを願うのみです

■「キエフにもモスクワにも知人がいない」と話す。

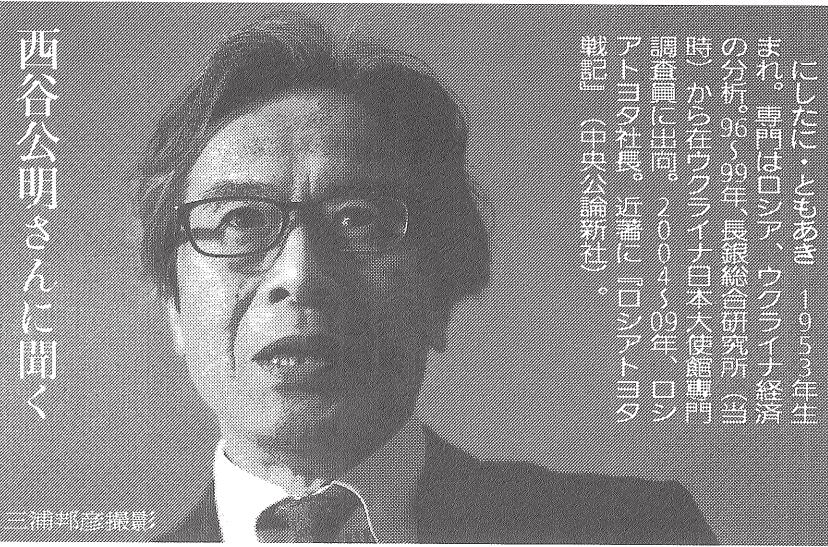
■「西谷公明さんによると、ウクライナとロシアは、同じ東スラブ民族に属し、言語や文化も近い。10世紀にキエフ公国（キエフ・ルーシ）がキリスト教を国教として以来、ウクライナはロシアの「ルーツに関わる地」であり、17世紀以降はロシア帝国、20世紀にはソ連の一部だった。

「西国は『歴史的な一体性』（ペーチン露大統領）を持つという考え方がある。ロシアには、ウクライナが冷戦終結後も『対ロシア軍事同盟』の性格を保つNATO（北大西洋条約機構）に加盟することはない。

■「国を二分」
一方、ウクライナには以前から、かつてポーランドや旧オーストリア・ハンガリー帝国の一部だった西部を中心に、ロシアからの独立を強く求めるナショナリストが多くいた。西谷さんは1992年、ウクライナの国会に当たる最高会議の経済改革委員会に半年間籍を置き、ルーブルに代わる独自通貨グリーナの導入など、市場経済への移行をつぶさに見守った。

「ウクライナは当時、人口500万人超の大國で農業や重工業も発展していた。改革がうまく進むべくヨーロッパとロシアを橋渡しする豊かな国になれるだろう」

ウクライナ情勢が緊迫する中、ウクライナとロシアの対立を憂えているエコノミストがいる。N&Rアソシエイツ代表の西谷公明さん（68）だ。1990年代に独立直後のウクライナで実地調査を行い、キエフの日本大使館勤務の後、2000年代にはトヨタ自動車のロシア現地法人社長を務めるなど、双方の社会・経済の実情に詳しい。両国のこれまでの関係と今後の見通しについて聞いた。（文化部 松本良一）



西谷公明さんに聞く

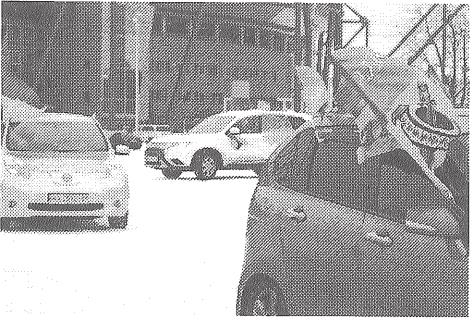
三浦邦彦撮影

■ 転機

だが、当時から気になっていたのは、ソ連を継承したロシアから完全独立を早急に推進するナショナリストと、ロシアと良好な関係を望む東部の住民との意見の違いだったという。「経済基盤が弱い独立当初、旧ソ連時代からのサプライチェーン維持は必須だったが、ナショナリスト主導の政府はそれを顧みなかつた。東部のドンバス地方で反発が広がり、政治の迷走が始まった」。西部のナショナリストと東部住民の対立は、90年代半ば以降、親米欧派と親露派に分かれ、選挙のたびに国を二分する論争が続いた。

■ 当面は強硬路線か

西谷さんは「ロシアのやり方は到底容認できるものではない」とするが、エコノミストの立場から「ロシアとの関係改善なしにウクライナの経済発展はあり得ない」と指摘する。しかし、ウクライナは24年に大統領選挙を控える。ロシアによる脅威が高まる中で、今回の対立が武力衝突に至らなくては、当面は対ロシアで強硬路線を貫くと予想する。



ウクライナの国旗を掲げて車列をつくり、ロシアの軍事的圧力への抗議を示す市民ら（田村雄撮影）

■ 「クリミア」が招いたNATO接近

■ 露は「恐怖」の輸出で譲歩狙う

キエフの西谷さんの知人の中には、義勇兵に志願してドンバスで親露派と戦っている人もいる。一方、モスクワの知人は「ウクライナはいつかロシアの元に帰つてくれる。でも、それは数十年か、もつと先の話だ」と話していたという。

「ウクライナとロシアの対立に勝者はいない。戦争は共倒れを招く。武力に訴えるのではなく、偏狭なナショナリズムを克服し、現実的な観点で問題解決の道筋を見つけてほしいと願っています」

の動きが加速した。ロシアは親露派武装勢力を支援してドンバス地方を実効支配させ、ウクライナを分裂状態に置くことでそれを阻止しようとしている。西谷さんは、「ロシアが軍事侵攻すれば、ウクライナ国民の手ごわい抵抗に遭うでしょう。国際社会からの制裁もかづてなく厳しいものになる。プーチンは『信じられる恐怖』を輸出することで、ウクライナと米欧諸国からNATO加盟断念の譲歩を引きだそうとしていると思う」